

懦夫をして起たしめる

長 田 裕 二

大平総理逝去の連絡を受けたのは六月十二日午前五時五十分、大阪のホテルであつた。選挙の最中で、私は中国地方の遊説から前夜遅く大阪に着き、その朝上京して科学技術庁で宇宙開発委員会に出席し、その後都内を選挙カーで回る予定にしていたのである。悲痛な心で予定通り八時半に羽田に着いたが、あとは虎の門病院弔問、宇宙開発委員会、午後五時臨時閣議、総辞職、伊東臨時代理以下による職務執行ということになつた。

大平先生に間近に接するようになったのは幹事長ご就任の昭和五十一年十二月からで、以来二年余り、衆議院から七人、参議院から二人出ている副幹事長の一人としてご指導いただくことになつた。

役員会や党改革、選挙対策等いろんな場面での大平幹事長は、いつもひとの話によく耳を傾けたうえで簡潔にしかも情理かねそなえたしめくりをされた。会合での挨拶も雄弁ではないが内容の豊かな品格の高いものであつた。二年余りの間に違和感や納得しがたいような気持を抱くことは少しもなかつた。

その後五十四年十一月九日、第二次大平内閣に列し、科学技術庁長官・原子力委員長・宇宙開発委員長として再び間近に接することになつた。閣議はいつもなごやかで、お互いの立場を尊重するというよりむしろ各閣僚が互いに助け合つといった温かい雰囲気であつたが、これは各人の性格や閣内に大平総理刎頸の友人がおられたことなどのほか、総理の誠実な人柄の反映であつたように思われる。

また学殖や識見の広さ深さは私が充分つかがい知り得べくもなかつたが、日本の原子力開発にとって重要だつ

たキャンドゥー炉の導入問題は国の内外にわたり極めて複雑困難だったにもかかわらず、予算委員会の論議や人事の扱い及び力ナダ訪問の際の折衝などを通じてみるかぎり、大平総理は十二分にそれぞれの主張の内容や背景、影響、日本の原子力行政のあり方などについて広く深い認識と洞察力を持ち、正しい評価をしておられるように思われ、心から敬服した次第である。

さらに、巷間よく歴代内閣が科学技術を軽視しているのは科学技術会議がたいてい十分間くらいで終了していることでも明らかだといわれているが、私の在任中の五十四年十二月の本会議は大平議長のもとに四閣僚、学術会議議長、五人の議員が出席して防災に関する研究開発、中国の科学技術、オーバードクター論議から官学民連携による科学技術振興等の問題が縦横に論ぜられた。昭和五十六年度予算においてはこれらの趣旨が生かされ、「科学技術会議の調整機能の強化」が画期的な重要項目としてとり上げられた次第である。なお今も忘れられない一場面は五十四年十二月二十九日深夜、総理官邸での国防会議が終るとすぐ、私のそばに歩み寄り、「個人年金が来年に持ち越しになってしまつて、あなたの支持者達がさぞ力を落すでしょうね」と申された。「相当がっかりすると思いますが、来年何とか」とお答えすると、二度ばかりうなずきながら私の体を押して戸口に向かわれた。十三年前政治の道に志したとき、私は相当つらいことやいやな目にも遭わねばなるまいと覚悟したものである。ところが意外に嬉しかったことは、政治家の多くが世間で想像する以上に真実を求め理想を抱いて熱情を燃やし努力していたことである。特に大平総理が国民、党、国内政治、国際関係等について、あるべき望ましい状態へ一歩でも近づけるため、関係者のそれぞれの立場を思いやり尊重しながら、祈るような気持でねばり強く、最後には壮烈な死をもってしてまで努力され続けたことは、その死が残念で惜しまれてならないだけに一層私も備夫をして起たしめるものがある。

(衆議院議員・第二次大平内閣科学技術庁長官)